

釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の
横顔

○上○

釧路の風土の 貴重さ痛感

五十八年度釧新郷土芸術賞の受賞者が決まった。音楽部門でピアノのアンサンブルに地道な活動を続けるディスクール・シュル・ピアノ、美術部門で鮮烈な色彩感覚で道東の風土に取り組む油絵の海月清則さん、そして特別賞には画業六十余年、釧路に水彩画を育てた佐竹泰次郎さん（米沢市在住）―十九日の贈呈式を前にそのプロフィールを紹介する。

生命の尊さを 確認したい

やはり感激したんですね。大きくなったら、ゴッホみたいな絵かきになりたいと思った」小学四年の時にたまたまゴッホの絵を見た。「あの時は、以来、絵ひと筋の道を歩むこ

道東の風土を絵筆に

自然と人間の関わり合い追求

欣喜、美しさ、醜さ。「何かつかもうと、もがいて突進するけど、スルリと逃げられてしまう」。まだ若い。体当たりで挑戦しようとする闘志が静かな語り口からあふれてくる。「わき目もふらず一心不乱で来たつもりだが、脱線も多い。七年ほど前の作品を見ると、絵具に石膏をませたりと、試行錯誤していた。この十年間は二十年ぐらい生きてきた思い」。しかし充実感に

福武書店から依頼されての絵本作りに、今年一月から取り組み、牛の誕生から成長する姿を追う。「達古武の酪農家へ取材に通ったが、すさまじいですね」と驚く。子牛の生の輝きにふれて、自己の足もとを見つめ直した。「ここにいてどうかと迷い、上京したが厳しい釧路の風土が私にとっていかに貴重であったかを再び痛感させられた」と打ち明ける。「皆に守られて私はラッキー。受賞を機にさらにかんばらねば」。その覚悟を改めてかみしめ、初冬の寒気に胸を広げていた。

に卒業。騒がしい東京は性に合わず、四十九年に帰釧した。六年前、松浦町の両親のもとから離れ、遠矢のトリトウシへ古材などでアトリエを建て製作の本拠地とした。「絵を置く物置きにと建てたが、大作も描けるのでアトリエに変わった」という三十畳の平家で、芸術への炎をかき立て制作に励む海月さん

「生命に焦点をあて生きてる実感を描き込みたい」。生の

〈絵画〉

海月清則さん (三)

アツパル君

木崎ゆきお

